

特集

〈事例〉

安全・適正就業委員会を毎月開催 講習や巡回で安全を徹底

公益社団法人
富谷市シルバー人材センター

(宮城県)

富谷市SCは、「令和6年度安全就業シルバー人材センター優秀賞」を受賞した。平成18年の重篤事故をきっかけに事故ゼロを目指して、安全就業に向けた多様な取り組みを展開。安全・適正就業委員会を毎月開催しつつ、安全講習会や安全パトロールを継続して事故を未然に防ぐとともに、現場で得た会員の声を取り組みに反映している。こうした活動が浸透し、会員の安全意識は着実に向上している。

富谷市SCは、「令和6年度安全就業シルバー人材センター優秀賞」を受賞した。

長谷川宏理事長は、『安全は全てに優先する』のスローガンの下、安全・適正就業委員会が中心となり、安全講習会や安全パトロールなど日頃から多様な取り組みを展開しています。受賞はそれらを積み重ねてきたたまものと受け止めており、今後も気を引き締めて、活動を続けていきます」と受賞の喜びと今後への思いを語った。

安全・適正就業委員会を中心に推進

安全・適正就業への取り組みは、理事2人、主な職群班から選出さ

れた会員7人と職員1人の計10人で構成する安全・適正就業委員会（以下、委員会）が中心となっており、行っている。

委員会では、安全・適正就業推進計画を策定し、計画に基づき活動の推進を図り事故防止に努めるほか、事故防止対策の検討、健康管理対策の推進、仕事の依頼内容に関する安全確認および内容の見直しなどを行う。毎月1回会議を開いて、事故の発生状況や安全パトロールの結果報告などを実施している。

委員会の下部組織として、屋外作業を担う会員7人を地区安全対策員（以下、対策員）に選任している。対策員は各現場で、朝礼時

などに事故事例を挙げて注意喚起を行ったり、危険予知活動（KYK）の徹底を呼び掛けたりして、事故防止に努めている。

委員会と対策員は安全合同委員会を年2回（6月、3月）開催し、安全推進に関する現状と問題点の把握、対策の検討や、毎年開催する安全・適正就業推進大会の準備を行う。

また毎年1月には、役職員、委員会、対策員、職群班長等が集まり、安全祈願祭を開催。一年の安全を祈願している。

令和6年度は「ハチ刺され」が多発

近年の事故件数は、令和3年度

が17件（傷害事故6件、物損事故11件）、令和4年度が9件（傷害事故5件、物損事故4件）、令和5年度が7件（傷害事故2件、物損事故5件）、令和6年度が16件（傷害事故12件、物損事故4件）となっている。

令和6年度はハチが多く発生し、「ハチ刺され」事故が8件起きたことが事故件数を増やした。対策として危険予知活動を徹底するようになっているが、それでもハチに遭遇するケースがあるため、駆除スプレーを支給して積極的に使ってもらおうようにしている。実際に刺されてしまった場合は、体調に異変を感じたら、すぐに病院に行くよう指導している。

除草班の会員は毎年講習会を受講

職群班は9班あり、最も規模が大きいのは班員74人（令和6年6月1日時点）の除草班である。受注件数が多く、作業中の飛び石に

よるガラス破損事故が目立つことから、安全・適正就業への取り組みは、除草班に向けた事故防止対策を中心に展開している。

その一つが例年5月に開催している「除草班安全・作業就業講習会」で、10時〜15時30分の予定で座学と実技を行う。

座学では、作業開始前の準備から後片付けまで全体の流れを理解した後、順を追って行動のポイント、注意事項を確認する。例えば

「近隣住宅へのあいさつ」「安全標識類の設置」「作業内容の指示・安全確認」「作業者全員による『危険予知活動表』へのサイン」「出来栄の確認」「忘れ物や施錠の確認」など就業当日の行動を一つずつ確認していく。さらに、刈り払い機の取り扱い不注意、転倒、熱中症ハチ刺されなどによる事故防止のための安全重点事項を確認。加えて、緊急時の体制、前年度のセン

ターの事故発生状況、作業別安全就業手順、具体的な安全対策、ヒ

ヤリ・ハット体験の事例などを確認する。

実技は屋外に移動して、作業前のラジオ体操、歩測による距離感確認（実際に歩いて5m、10m、15mの距離感をつかむ。刈り払い機による作業において、ほかの作業者と一定の距離を取るための訓練として行う）、危険予知訓練、安全標識や飛散防止ネットなどの取り扱いを確認する。

この講習会は、同じ内容で2日

間設定して開催し、原則として、除草班の会員は全員がいずれかに出席する。市から受託する公園や学校敷地内等の除草（年間100か所以上）の仕事には、受講した会員のみが就けることとし、講習会の受講を必須としている。

安全・適正就業推進員を務める柏山壽幸事務局次長兼業務係長は、「1年たつとどうしても忘れてしまうので、除草班の会員には毎年受講してもらいます。距離感など



除草班安全・作業就業講習会（実技）。歩測による距離感確認（写真上）のほか、草刈り作業中の飛び石事故を防止するため飛散防止ネットの扱い方訓練（写真下）も行う

も鈍ってくると思うので、1年に1回は実技で感覚を取り戻すことが大事だと考えています」と講習会の意義を語る。

そのほかにも、安全就業の心得やルールを学ぶ基本講習会を毎月開催しており、新入会員の受講を必須にしている。

安全パトロールの実施

屋外作業（除草・植木剪定等）

が多くなる6～11月にかけて、毎月1日と15日を「安全の日」と定めて、委員会のメンバー数人と事務局職員により、安全パトロールを実施している。1日に8か所ほどの現場を巡回し、チェックリストによる安全確認、現場への声掛け、事故事例を挙げての再発防止策の周知・徹底に取り組んでいる。また、歩道などに設置して作業の危険を知らせるコーン標識を暗がりでも見えやすい蛍光タイプのものに変えるなど、会員の声・要望を聞き、できることはすぐに対

応するようにして、事故の未然防止に努めている。

安全・適正就業推進大会を開催

センターでは毎年、安全・適正就業推進大会を開催している。令和6年度は7月25日13時30分から約2時間、富谷中央公民館大ホールで開催し、会員と関係者を合わせて94人が参加した。

当日は、長谷川理事長のあいさつから始まり、公益社団法人全国シルバー人材センター事業協会の「令和6年度安全就業シルバー人材センター優秀賞」受賞の報告と表彰状披露、安全就業に貢献した地域班・職群班・会員の表彰、安全標語コンクールの入選者発表と表彰を行った。その後、若生裕俊市長をはじめとする来賓の祝辞に続き、富谷消防署の協力による「各種事故による救急事態の初期対応等について」と題した講話を聞き、対策員による安全就業宣言を行っ

た。最後に、委員会の副委員長である野坂恵三理事が閉会宣言をして終了した。

安全標語の募集と掲示

毎年、安全意識を高めるために会員から安全標語を募集して、最優秀賞・優秀賞・特別賞を選び、安全・適正就業推進大会で表彰している。入賞作品は、1年間にわたりセンターの安全スローガンとして各種資料に掲載するなどして安全意識の啓発に活用していく。毎年60～70作品の応募があり、安全標語選考委員会が審査・選考をしている。

令和6年度の最優秀賞は、「TOMIしるの 願いは一つ 安全就業」（「TOMIしる」は富谷市SCの愛称）が受賞した。

そのほかの取り組みと工夫

ほかにも、1人作業の原則禁止や、安全管理目標の掲示、会報を活用した安全就業関連情報の発信



保護帽には大きな字で名前と血液型を明記。ラジオ体操を行うためのカセットデッキと救急箱は各職群班に配布している

など、多様な取り組みを展開している。また安全知識向上を目的に、各種講習会（救命、安全衛生、安全運転）を開催している。

安全就業に取り組む中で、次のような工夫が生み出された。

●保護帽への記名

保護帽の前後には平仮名で大きく本人の名字を、側面にはフルネームと血液型を記入している。除草作業などに、背後からでも名前を呼んで注意を促すことができるようにするためだという。



写真左から野坂恵三理事、長谷川宏理事長、須藤武夫副理事長、柏山壽幸事務局次長兼業務係長

●インナーキャップの考案

会員の意見や要望を取り入れて、日よけ、汗止め用に保護帽のインナーキャップを考案した。インナーキャップは、独自事業「ギャラリーなごみ」を拠点に小物づくりを行うグループ「なごみの会」が製作し、センターで販売している。

●ヒヤリ・ハット体験の共有

数年前からヒヤリ・ハット体験を作業終了時のミーティングで共有するように促している。また、

それまで難なくできていたことが

何かのきっかけで怖いと感じるようになることがあるため、委員会メンバーや職員は日頃から会員に対し、「例えば、脚立に上ることが『怖くなった』と感じたときは言ってください。上らなくてもできる作業をしてもらえばいいのですから」と呼び掛けてきた。その結果、年齢の高い会員が自己申告しやすくなり、より安全な作業へと就業の仕方を変えるケースも見られるようになった。

今後に向けて

安全就業に向けた熱心な取り組みの背景には、過去に起きた事故の教訓がある。平成18年に草刈り作業中、草刈り機が近くにいた会員の腕に当たって全治1年半の大けがを負った。センターでは、二度と重篤事故を起こさないために、委員会を毎月開くようになり、現在のようなさまざまな取り組みを展開するに至った。それ以降、重

篤事故は起きていない。

柏山事務局次長は「委員会を毎月開いていると気付きがありますし、継続していくことが大事だと思います。油断や慣れが事故につながるので、今後とも伝えるべきことは伝えて、事故防止を徹底していきます」と語る。

センターでは、さまざまな活動によって安全意識が会員に浸透してきたと感じているが、引き続き危険予知活動の徹底や注意喚起が必要だと考えている。

委員会の今後の取り組みについて、野坂理事は「やはり現場で仕事をする人たちの安全に対する知識や経験から学ぶことはたくさんあります。そこから学んだことを生かして、安全就業に関わる新たな提案をしていきたい」と語る。

委員会の委員長を務める須藤武夫副理事長は「安全パトロールは月2回実施していますが、それとは別に暑い日などは現場を訪ねて、休憩や水分補給、体調の変化に気

事業運営状況

(令和元年度～令和5年度)

年度	会員数			粗入会率	就業実人員 (延人員)	就業率	受注件数	契約金額	公民比
	男性	女性	全体						
	人	人	人	%	(人日)	%	件	千円	%
令和元	355	122	477	3.5	467 (51,111)	97.9	1,696	262,635	49.0/51.0
2	359	101	460	3.3	434 (48,296)	94.3	1,398	253,865	49.8/50.2
3	340	102	442	3.1	432 (47,887)	97.7	1,419	251,652	50.5/49.5
4	319	102	421	2.9	402 (44,390)	95.5	1,308	238,507	55.0/45.0
5	325	107	432	2.9	383 (42,914)	88.7	1,294	231,595	55.7/44.3

※受注件数、就業実人員、契約金額は請負・委任と労働者派遣事業を合計した数値

※就業実人員は請負・委任と労働者派遣事業を対象

※就業延人員は令和2年度から労働者派遣事業の教育訓練受講を含む

※令和5年度以降は性別未回答の会員がいるため、会員数の男女計と全体は必ずしも一致しない

を付けるよう声掛けをしています。そうしたことも含めて、これからも地道に活動が続けていきます」と話す。委員会メンバーの熱意も、会員の安全意識を高めてきた大きな力といえるだろう。

(増山美智子)